国史跡

光明山古墳

Kohmyohsan Tumulus

浜松市文化財課

Hamamatsu City,Cultural Properties Division

■光明山古墳とは

令和２年３月10日 国史跡指定

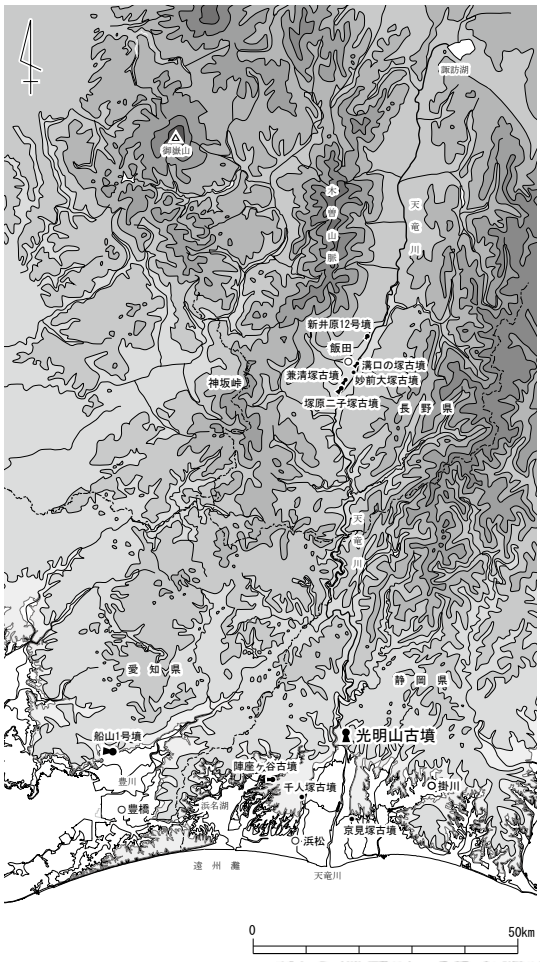
光明山古墳は、静岡県浜松市天竜区山東の丘陵上に所在する浜松市内最大の前方後円墳（全長83m）です。光明山古墳が築かれた天竜の地は信濃や遠江南部地域、遠江東部地域、奥三河へつながる交通の結節点にあたり、地域の政治と経済の中心地のひとつとして重要視されました。

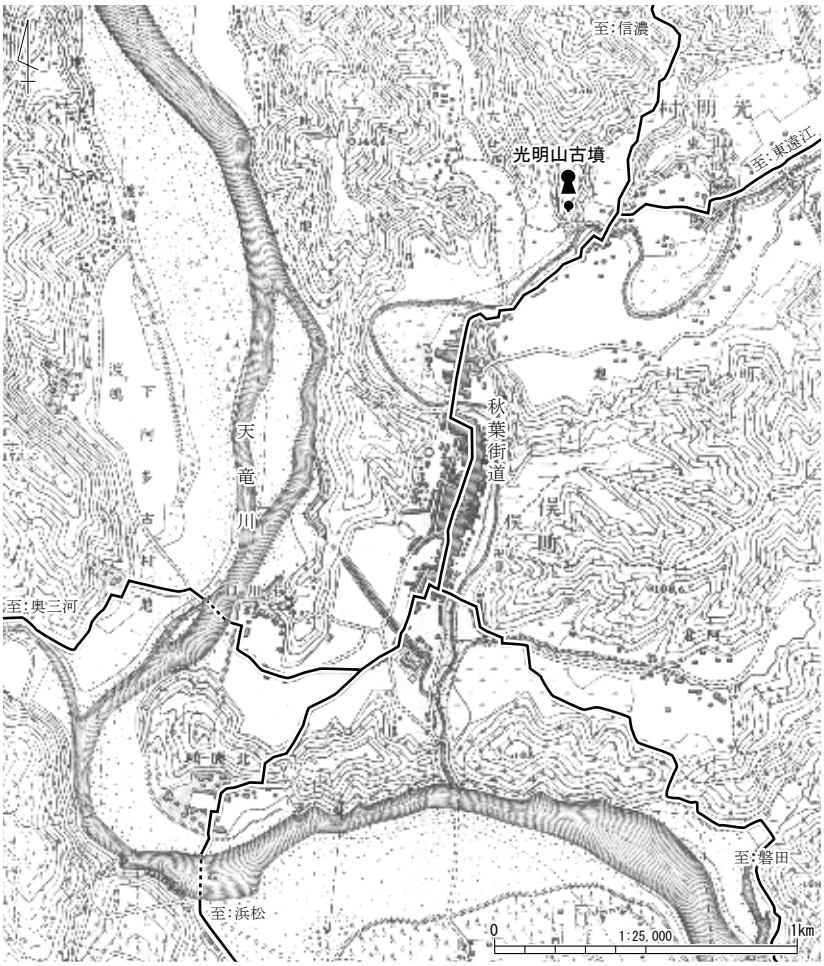
光明山古墳では、これまでに静岡大学や静岡県教育委員会、関西大学によって測量調査が行われています。2018年、浜松市文化財課では古墳の内容や周辺の地形を把握するため、発掘調査と測量調査を実施しました。古墳の遺存状態は良好で、墳丘斜面には葺石が施され、墳丘の頂上や中段には埴輪が立て並べられていました。墳丘の形状や埴輪の特徴などから５世紀中頃から後半に築造されたと考えられます。

光明山古墳の南側には光明山２号墳（造り出し付円墳）が築造されました。発掘調査により直径32m、造り出し部を含めると全長38mあることが明らかになりました。墳丘の周りには周溝がめぐり、葺石や埴輪は伴わなかったとみられます。築造時期は、５世紀後半から６世紀初頭を中心とした時期と考えられます。

※光明山２号墳は、1971年の発掘調査後削平され現在見ることができません。

光明山古墳群復元図



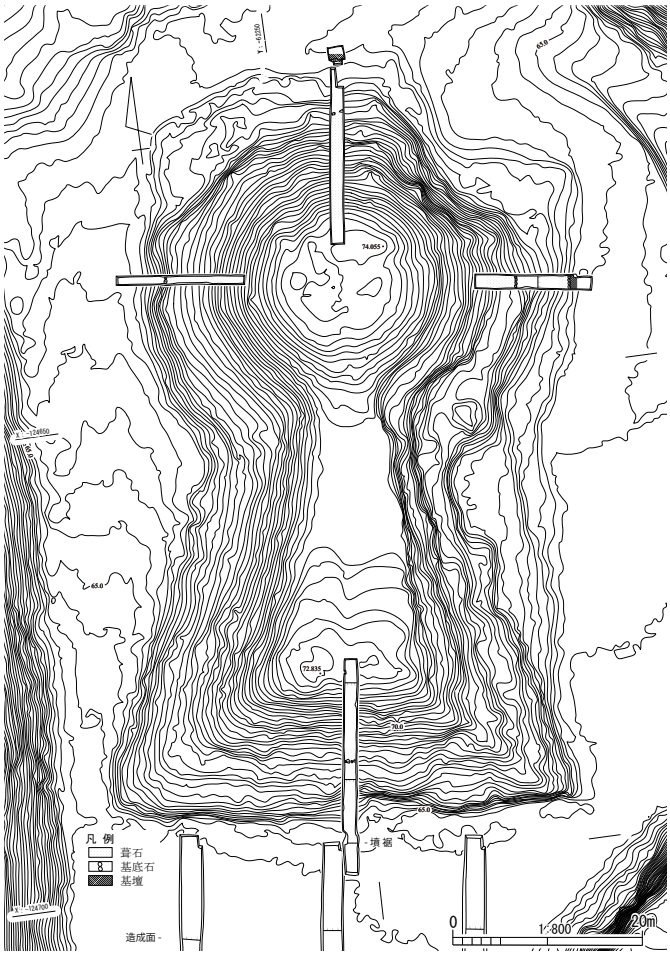


光明山古墳の立地環境

■どのような古墳なのか

墳　丘　光明山古墳は全長83mの前方後円墳で、後円部の高さは8.5mあり、墳丘は２段で築かれています（２段築成）。下段墳丘は地山を削り出し、上段墳丘は土を盛って構築されています。墳丘の上段と下段の間には幅約2.2mの平坦面があり、後円部・前方部とも平坦面の高さはほぼ水平に巡っています。墳丘の斜面には上下段ともに葺石が施されています。特に後円部北側の斜面では、葺石が基底部から墳頂部まで高さ6.8mにわたって良好な状態で残存しており、築造当時の状態が確認できました。葺石には長辺約20cmの角礫が用いられ、それよりも若干大きめの石材が基底石から墳頂まで一直線に並べられていました（区画石列）。上段、下段の基底石には約30～40cmの石材が使われています。下段墳丘の基底石の外側には高さ25～50cmの基壇が設けられています。古墳の周囲には幅約10mの範囲が平坦に造成されています。

埴　輪　埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪に限られます。基底部に段を持ち、窯で焼成された淡輪（たんのわ）系埴輪で、墳頂部と中段平坦面に立て並べられていたと考えられます。円筒埴輪は２条の突帯を巡らせた３段構成を基本とし、円形の透孔（すかしあな）が施されています。



光明山古墳墳丘図と発掘調査位置

２段築成の墳丘と葺石（後円部東側）

埴輪出土状況

埴輪は墳頂部から墳裾にかけて数多く出土しました。築造当時、埴輪は墳頂部や中段平坦面に樹立されていたと考えられます。

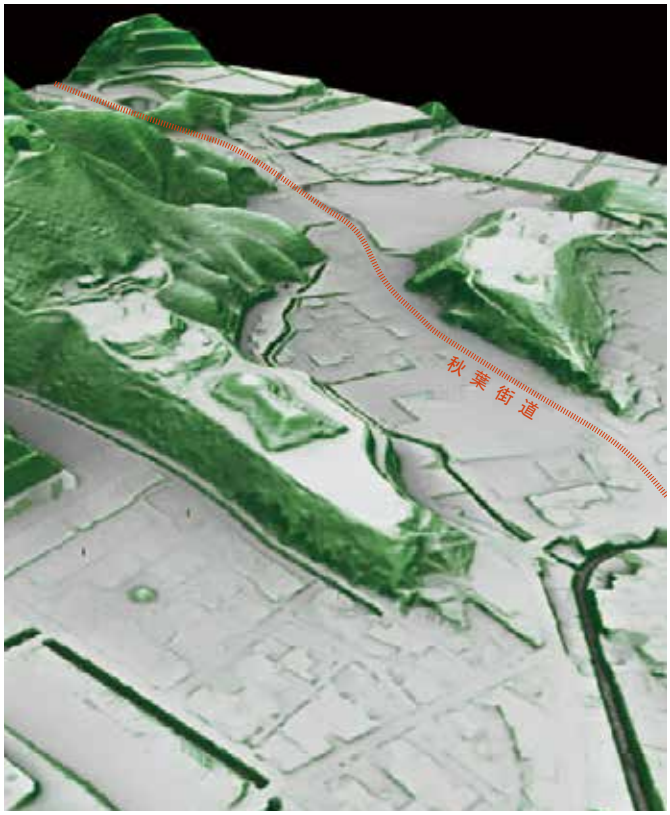
埴輪の特徴

突帯は低平で幅が広い形状のものが多く、ヨコハケ調整を胴部だけでなく突帯上にも施しています。

■誰が葬られているのか

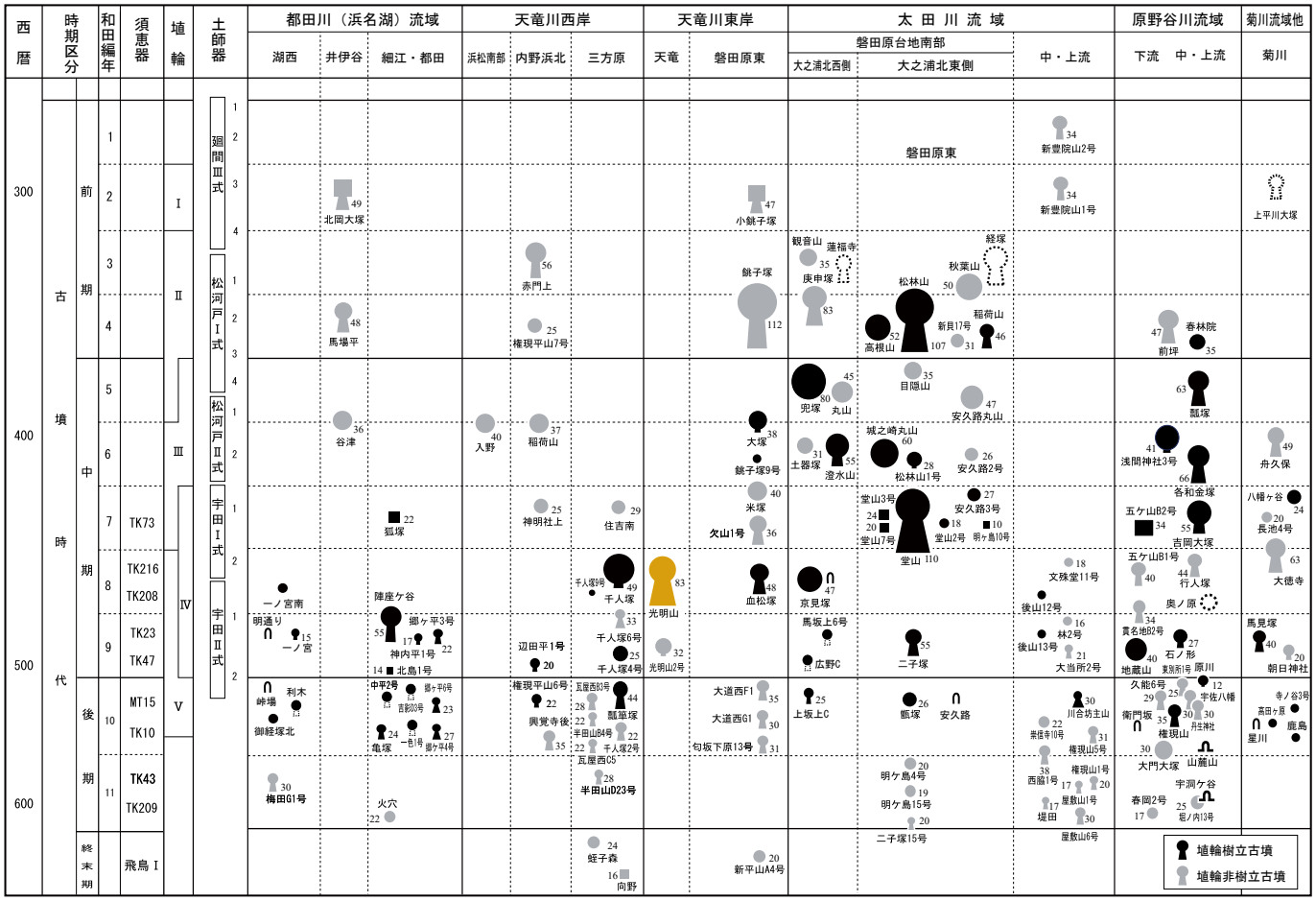
埋葬施設を調査していないためどのような人物が葬られているか詳しく分かりません。しかし、古墳の特徴を探ることで被葬者像を推測することが可能です。光明山古墳は天竜の地に築かれた唯一の前方後円墳です。前後する時期に大きな古墳を認めることができず、独立性が高い古墳といえます。

光明山古墳が築かれた５世紀は、渡来系文化が積極的に移入され、馬を使った内陸交通が著しく発達した時期にあたります。光明山古墳が立地する天竜の地は交通の要衝であり、光明山古墳の被葬者は陸上交通網の開拓や掌握に大きな役割を担った人物と捉えられます。また、埴輪に渡来系の技術が用いられており、被葬者は新来の技術移入にも積極的であったことがうかがえます。光明山古墳の墳丘形態は近畿地方中枢部の古墳と共通しており、倭（やまと）王権との結びつきがうかがえます。いっぽうで古墳の築段数は２段で、形象埴輪を欠き、独特の形状を見せる埴輪を採用しているなど、独自性も認められます。光明山古墳の被葬者は、倭王権と結びつきを持ちつつ、渡来系の技術を積極的に導入する中で独自性も発揮し、内陸交通の掌握と地域の開発に指導力を発揮した新興の首長と考えられます。



光明山古墳とその周辺の地形立体図

航空レーザ測量を行い、立体的に古墳とその周辺の地形を把握できるようになりました。光明山古墳の墳丘が２段になっていることや、信濃からつながる秋葉街道が光明山古墳の直下にあることがよく分かります。



光明山古墳と周辺地域における古墳の変遷

表紙：光明山古墳後円部北側
本紙は和田達也（浜松市文化財課）の監修のもと北澤志織（浜松市文化財課）が作成した。

発行　浜松市市民部文化財課
印刷　株式会社ハマプロ　2021.01刊行